

『同人雑誌の過・現・未——最近の文学動向を睨みながら』

文芸評論家・法政大学名誉教授 勝又 浩

ご紹介頂いた勝又浩です。先ほど何人かの方とご挨拶しましたが、同人雑誌でお名前を知っている方ばかりで、初めてお会いしたという感じがしなかったのは、

本当にありがたいことです。今お話をされた島京子さんは、講談社が『亀井勝一郎全集』三〇巻を出したとき、僕はアルバイトで手伝っていたのですが、島さんが亀井氏とお知り合いだということで、編集担当者が月報に何か書いてくださいと島さんに電話でお願いしているのをそばで聞いたりしたことがあります。こういう思い出話を喋りはじめると、きりがありませんが、今日は真面目なお話もしなければなりません。

百年後に残る平成芥川賞作家：

まず、配布資料の最後のページ「平成の芥川賞受賞作家一覧」を広げてみてください。同人雑誌に関わっている方の多くは、芥川賞受賞作品くらいは読んでおられると思いますが、この一覧表を見て、どれくらい読んでいるか、気持ちがあ動くということがありませんか？ これは、『三田文学』115号（2013年秋）の「百年後に残る平成芥川賞作家のこの一作」のアンケートのために用意された一覧表です。

この表に記載されているのは一四八回までの作品ですが、このあと、一四九回

勝又 浩氏

文芸評論家・法政大学名誉教授

一九三八年（昭13）横浜市生まれ。法政大学大学院博士課程修了。長年「文学界」の同人誌評を担当。その後も「季刊文科」や「三田文学」で同人誌作品の批評を続ける。一九七四年、「我を求めて——中島敦による私小説論の試み」で第17回「群像」新人賞評論部門受賞。二〇〇五年、「中島敦の遍歴」（筑摩書房）で第13回「やまなし文学賞」評論部門受賞。
著書『作家論集 我を求めて』（講談社）、『作家論集 求道と風狂』（構想社）、『引用する精神』（筑摩書房）、『鐘の鳴る丘』世代とアメリカ』（白水社）ほか。

(平成二十五年上期)に藤野可織さんの「爪と目」と、一五〇回(平成二十五年下期)に小山田浩子さんの「穴」が選ばれています。小山田さんの「穴」は「不思議の国のアリス」を少し引っ掛けていますが、仕掛けの多い最近の作品の中では割合に素直な良い作品です。別のところで、僕は「不合格ではない作品だ」と話しましたが、古い仲間の間では好きなことを言い合っている訳です。皆さんは、百年後に残る、残したい作品としてこの中から一作を選ぶとしたらどれを選びますか？

僕は、西村賢太さんが同人雑誌『煉瓦』に登場した時から読んでおり、彼の作品を推薦して『文學界』に転載しました。しかし、その後は『文學界』の対応が遅れ、彼の力作は次々に『新潮』や『群像』にとられてしまったので、『文學界』は遅れをとりました。

彼の最初の小説「墓前生活」は、藤澤清造を発掘し、石川県七尾市まで毎月出かけて一人で法事をし、新しい墓ができてからは、住職に頼んで古い墓標をもらい受け、それを自分の部屋に飾っていることを書いた小説です。自分はひどい貧乏をしながら、忘れられた、やはり貧乏だった作家を取り上げている訳ですが、これは今の文学全体を象徴しているように思います。今は文学全体が、忘れられた作家みたいなものですね。ごく少数の信奉者だけがお墓参りをしてくれる。

参考までに申し上げますと、アンケート結果を基に、富岡幸一郎、陣野俊史、水牛健太郎、田中和生という若い四人の批評家が一人五作品ずつ選んで、四人の共通項として(『三田文学』一一五号に)

に「百年後に残る平成芥川賞作家の作品」をリストアップしています。四人が選んだのは、奥泉光「バナールな現象」、笹野頼子「金毘羅」、辻原登「村の名前」、多和田葉子「容疑者の夜行列車」、保坂和志「カンバセイション・ピース」、川上弘美「真鶴」、町田康「くっすん大黒」、吉田修一「悪人」、阿部和重「ピストルズ」、朝吹真理子「きことわ」の○作品です。

この中で、笹野さんは伊勢の方ですが、皆さん知ってますか？ 多和田さんが芥川賞を受賞したのは別の作品です。保坂さんは、何にも起こらない一日を書いているような小説、そんなタイプの小説を一時期流行らせた人です。川上さんの「真鶴」は評判の良い小説ですが、僕はそれほど感心しませんでした。吉田修一さんの「悪人」は旨い小説ですね。阿部和重さんは僕と波長が合わず、何度読んでもだめです。とにかく、百年後この予想が当たっているかどうかを確かめてみたいですね。今から百年生きるのは大変だけど、何か確かめる方法がないかな？

「ご愛嬌でいうと、赤染晶子さんの『乙女の密告』をぜひ読むと良いですよ。これくらい腹の立つ小説はめったにないからです。お話も人物たちも要するにアニメのキャラクターです。しかし、こんなのが芥川賞に通ってしまうのですね。まあ、芥川賞だけでなく文学賞はかなり時の勢いが影響し、勢いで決まるところがある訳です。

文学、芸術には絶対という尺度がなく、いつも時代の空気を吸っています。西村賢太さんにしても、その前にもっと良い作品があるのに、我々から見れば二番煎じの「苦役列車」で受賞している訳です。僕に言わせれば、中卒の西村さんを名門の出で最高学府を出た朝吹真理子さんと

セットにして話題を作った訳です。七十四歳で受賞した黒田夏子さんにしても、その時の直木賞受賞者、朝井リョウさんが史上最年少の二十四歳だったそうですから、この二人をセットにして出すと言うのも話題作りの政策であり、皆がそれに乗せられている訳です。

芥川賞は時代にとらわれずうまく選ばれている、と前述の『三田文学』の座談会でものんきなことを言う人がいますが、僕に言わせると「何を言っているか」です。例えば一三九回の中国人の楊逸（ヤン・イー）さんの受賞は北京オリンピックの半年前で、皆が中国、中国と大騒ぎしていた時だったから、僕は「またやっているな」と思ったものです。

こんな見方は僕の好きな中島敦が昭和十七年に芥川賞を逸した時から始まりです。太平洋戦争中にイギリス人のことを書いた小説は芥川賞として通してくれなかった訳です。時代を見ていた（評論家の）吉田健一が、「あの時の審査員はみな狂っている」と書いています。ただ、

西村賢太さんと朝吹真理子さんがセットになった時も、偶然で、意図したものではない（かも知れない）し、また実力がなければ並べる訳にもいかないのも事実です。厳密に言えば半分意図的、半分偶然だとと言えるかも知れません。

芥川受賞者について言えば、いっぱい言いたいことはあります。偉そうに言いますが、僕が駄目だなと思った作家は、受賞の後、あまり書いていませんね。この会でも講演された荻野アンナさんだって、受賞のあと作品をあまりみないでしょう？ 『季刊文科』にも、エッセーならというだけで、一度だけ書いてもらいました。彼女は小説より落語の方が得意なようです。落語をやるから小説が書けない訳ではないでしょうが。受賞作「背



勝又 浩氏

負い水」については、僕は困るなあと思いました。僕流に言うとは良くない。荻野アンナさんの作品には、本質的にウソがある、というのが僕の読みです。だから、小説としてはそれ以上には進まなかった訳です。赤染晶子さんは僕の全く知らない方ですが、彼女も後が続かないですね。まあ、他にも腹が立つ作家はたくさんいますが。

それでは、お前は誰が良いのかとよく訊かれますが、例えば、僕は吉村萬彦さんが好きですね。彼が受賞した年、僕はちょうど『新潮』の「月評」をやっていたので毎月の文芸誌を全部読んでいたが、彼の「ハリガネムシ」はびか一でした。力があつて、芥川賞の候補に挙がっている時から、当時僕は現役の教員でしたから「今度はこれだぞ。これを選ばない審査員はみな駄目だよ」なんて学生を前にして吹いていました。そして何かの会合で学生と飲んでいたら発表があり、学生たちと乾杯しました。そういう縁で、吉村さんには『季刊文科』に連作をお願いし、書いてもらっています。彼

は、支援学級の先生をずっとしていましたが、昨年先生業を辞めて背水の陣で書くこうとしていた時だったので、お願いして書いてもらった訳です。

この機会に思い出しましたが、一二二回受賞の玄月さんは大阪文学学校の出で、同人雑誌出身ですね。大阪文学学校出身の力ある人たちが作った『白鴉』という雑誌です。毎号分厚い雑誌『白鴉』を我々は読むのに苦労する訳ですが、玄月さんはすごかった。こういう破壊力を持った作家が僕は好きですね。後で私小説のことを話しますが、僕は私小説を研究しています。しかし、僕の好みはそれだけでなく、それと正反対のものも好きなのです。玄月さんで面白いのは、「芥川賞を取ったら単行本が売れるのかと思つたが、ちつとも売れない。芥川賞では飯が食えない。だから、これからは芥川賞作家の本くらい買つてやることにした」と何かのエッセーに書いていたことです。これが純文学の世界でしょう。玄月さんには、『季刊文科』にも書いてもらつてます。

玄月さんが芥川賞を受賞したのは「陸の棲家」でしたが、僕が推薦したのは、「舞台役者の孤独」という迫力ある小説で、ひとめぼれでした。そのとき書く当番だった大河内さんは、途中まで読んで何しろ長いので音を上げたいのです。が、僕がほれ込んで強く推して転載にしてみました。

平成になると（玄月さんのように）同人雑誌出身の作家、受賞者が非常に少なくなりました。それ以前では、今そろそろ消えて行きつつある年代の作家、第三の新人とか内向の世代くらいまでの作家たちは、大体、同人雑誌をやつてきた人たちですね。そこから出て来るかどうかは、別ですが、彼らは同人雑誌を知っています。平成になると同人雑誌経験のない作家がほとんどで、同人雑誌出身の作家は非常に少ない訳です。その意味でも、玄月さんは大切な方ですね。

話があちこちに行きましたが、とにかく僕は西村賢太さんの「墓前生活」を選びました。「三田文學」のアンケート結果をみると、六人が西村賢太さんの作品

を推薦しています。桶谷秀昭さんもその一人ですが、思いがけないことに、仏教学者の山折哲雄さんも「苦役列車」を選んでいきます。彼の作品を読んでいるのですね。山折さんは、「百年前でも通用する作品だから、百年後にも残るに違いない」となかなか良いことを言っています。こういう長い目で見るのが大切ですね。

この頃の小説の実のなさ

アンケートのことはこれくらいにします。何を言いたいかと言うと、こういうものが話題になつていく時代の中で我々は文学をやつていこうと言うことです。これが一つの時代の空気になる。その、こういうものとは何かと言うと、赤染晶子さんをやり玉に上げているので、その勢いで言う、小説の中の仕掛け、派手なパフォーマンスを第一に考えているような小説ということですね。

若い人たちは、キャラクター、キャラが立つたんでよく言いますね。元来アニメの方のことばですが、人間の性格のことばです。人間を極端に、つまり漫画的に

パターン化しておいて、それを崩したりパロディ化して面白がっている。

パターンで書いているのは、大衆小説です。武士は武士らしくお相撲さんはお相撲さんらしくと。時代小説はこのパターンで書かれています。農民は農民らしく、です。

赤染さんの小説「乙女の密告」の場合も、僕が腹が立つのは、たとえばドイツ語の先生が出てくる所です。女子大学を舞台にして、学生が「アンネの日記」を暗唱して競技をする所へその先生が出て来るが、アンゲリカ人形を抱えています。その先生は、教室でも研究室でもいつもその人形を抱えていて、それがないと病気になるってしまう。ある悪い女子学生が密かにその人形を隠すと、先生はおたおたしてしまふ。実にひどい話です。もし、そういう人がいたら、それだけで一編の小説のテーマになるべきです。そんな問題を持っているのに、面白おかしくパターン化して書いているだけで、その人間性を掘り下げて書いていないのです。こういうパフォーマンスで一杯なので頭

に来る訳です。

テレビゲームが悪人、力のある人、お姫様というようにパターンで構成されていて、今の若い人たちがそれに影響を受けているから、こういうことになるのでしょうか。僕はテレビゲームをやらないから分からないけど。もう少し言うと、漫画と文学が重なっている、漫画ではあり得ることを平気で小説で書く、ということでしょうか。しかも、こんな仕立てのなかに「アンネの日記」を、つまりヒロコーストの問題を重ねている。フザケルナ、と言いたいですね。

それから、こんな例もあります。芥川賞審査員で人気のある女性作家が、黒田夏子さんの「a b さんご」について、「忘れられた大和言葉の美しさがある」と言っています。僕は「馬鹿も休み休みに言えよ」と言いたくなります。黒田さんは、傘のことを、天からふってくるものをよける布というようにと書き、漢語を片端からひらがなにして、読みにくくしているだけです。大和言葉とは何の関係もありません。小説にとにかく人目

を引く工夫が先行している訳で、「a b さんご」もその例です。

ただし、この作品は、普通の文章で書いてあれば中身の良い作品です。早く母を亡くし、父に育てられ、お手伝いとして来ていた女性がいつの間にか家庭に入り込んで母になるという、その間の少女の孤独を書いている訳です。普通の文章で書いてあれば僕もほれ込んだかも知れませんが、とにかく読みにくい、超読みにくい訳です。

なぜこの作品が芥川賞を受賞したかと言うと、推薦したのが蓮實重彦さんだからですね。何しろ彼は、日本語の文体はまだできていない、なんて訳の分からないことを平気で言う人です。文体が出来ていないのはご本人だけではないでしょうか？ この蓮實さんのお弟子さんたちが審査員について、黒田さんを推した……。こういう観察は良くないのですが、だから当選したという訳ではなく、年齢とか話題性で通った、と言えると思います。

僕らの前に「同人雑誌評」をやっていた久保田正文さんという方がいました。

僕らの前の世代の方で、僕は十七年しかやっていませんが、久保田さんは二十三年間も『文學界』の「同人雑誌評」をやった方です。その久保田正文さんのことです。僕が島京子さんを知った頃の話ですが、当時は僕も同人雑誌をやっていたので、久保田さんに褒められるとうれしかったものです。その久保田さんは、晩年によく「この頃の芥川賞はつまらん」と文句を言ったのです。僕はまだ四十代だったので、久保田さんのように歳を取るとそんな風に考えるものかと思つたものです。

ところが、僕も当時の久保田先生の年齢になり、この間、久保田先生と同じようなことを言っていることに気づいた訳です。確かに年齢のせいもあります。年を取るとたくさん読んでくるので、(多くの受賞作品が)物足りなく思いますが、若い時には読んだ物が少ないので、割合素直に納得できるのでしょう。

不満ついでに言いますと、この頃の小説は、円城塔さんの作品に代表されるように、人間性という意味で、「実」がな

いものが多いように思います。この円城さん、僕はちよつと注目しているのですが、空から人が降って来てそれを警官がバットで打つ、というような訳の分からないことを書いています。このような小説は、人間性、人生という意味では、じつに「実に乏しい」と思う訳です。

こう思うのは、僕がずっと同人雑誌を読んできたからだと思います。ですから、この辺で講演の題名の「同人雑誌の過・現・未」についてお話ししたいと思いません。

同人雑誌文化と私小説

配布してもらっている資料「私小説をめぐって」の一〇一頁上段にあるように、平成二十五年現在『文藝年鑑』に登録されている各種同人雑誌のうち、「小説・評論」と分類されている雑誌の数はおよそ240です。平成二〇年に『文學界』が「同人雑誌評」欄を閉じるに当って全国的に実施したアンケートへは320誌が回答を寄せているので、それから五年間に80誌が減少したことになります。

しかし、80誌がそのまま本場に減ったかは不明で、僕はおよそそのくらいが減った可能性があるくらいに考えています。なお、『文藝界』は永久保存版としての時の同人雑誌の誌名、代表者名、連絡先などを記録し残してくれているので、今も僕は大切に持っています。

『文藝年鑑』を追って行くと、『文藝界』の同人雑誌評が始まった昭和二十六年四月には38誌、昭和三十一年には99誌だった同人雑誌の数が、昭和三十三年にはいきなり358誌になっています。

その理由は、その前の年に石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞を受賞したからだと言われています。「太陽の季節」自体は新しく始まった新人賞受賞作でしたが、彼はその前に『一ツ橋文芸』に書いた小説が浅見潤に認められて同人雑誌の世界に登場していた訳です。

その後は増加の一途をたどり、平成元年には627誌になっています。その後は不況の影響などで一時減りましたが、阪神淡路大震災があった翌年には、再び増加しました。これまで最も多かったの

は、やはり震災があった平成十一年の702誌で、それから十四年たつて現在は平成二十五年の240誌となっている訳です。こうしてみると、同人雑誌も世の中の動きと深く連動しています。

さて、同人雑誌という文化制度は日本特有のもののようなものです。西洋では、個人が資金面の援助をして執筆協力者を得て雑誌を始めることはあっても、複数の人が集まって共同運営でお金を出し合つて雑誌を出すことはないらしいですね。同人雑誌評を長く続けた小松伸六さんも、ドイツに行ったとき、同人雑誌というのがとうとう理解してもらえなかった、と言っています。

全国の都市にカルチャースクールがあり、文章教室や小説教室があるのも、今、世界的にみると不思議な日本の現象のようですが、これは、全国に同人雑誌が存在するのと同じ現象ですね。そして、その現象は、昔からある短歌や俳句の結社の伝統から自然に派生してきた現代的なものかただと僕は考えています。個人プレーよりチームプレーという日本的な民

主的な形態でもあるようです。また、そういう組織の中で男女が平等に参加するというのも、ヨーロッパではあまりないようです。短歌は万葉時代、平安時代から男女平等でやってますが、西洋の詩は長い間、男だけのものでした。

近代では明治年間に尾崎紅葉、山田美妙らが作った『我楽多文庫』が後にいう同人雑誌のはしりだと言われていますが、同人雑誌という名称自体が使われ始めたのはずっと後のことで、ちょうど私小説がそういう名前前で呼ばれるようになったのと同じ大正中期です。尾崎紅葉は同人雑誌などということばは知らずにそれを始めた訳ですが、彼は小説の前に俳句作者でもあって、その発想、伝統から自然に小説での結社を作り、宗匠ともなったのですね。

資料に引用しておきましたが、秋山駿は、「日本語という言語の、生活への熟した浸透において、あるいは、日常的な生の断片を語るべき文学的に熟成された言葉を使えるのは、ほとんどすべて、私小説のお蔭である」と言っています。ま

ことにそのとおりなのですが、これをもう少し進めて、僕は、この私小説の前に「短歌・俳句のお蔭である」を入れるべきだと思います。私小説は、短歌・俳句の伝統の中から自ずから生まれ育ってきたものです。日本が同人雑誌文化の国であるという事実と、私小説を作り上げてきた国であるという事実は、一つの根から出ている、と考えています。

小林秀雄に「私小説論」があります。そこで彼はルソーの「告白録」を引用するなど、フランス文学の影響を強く受けて論じていますが、この「私小説論」に欠落しているのは日本語の問題です。一口に言えば、日本語が、その性格が私小説を含む日本文芸を作り上げたのであり、さらに遡って言えば、日本語が日本人の思考法や感性をつくり、日本人の自我を形作り、そして私小説もそこから生まれ、ということになるのです。

ルソーの「告白録」より八百年も前に「かげろふ日記」があったように、「告白」という一点をとつても、日本では西洋よりずっと前に「告白」という行為が

文学様式として成立していました。また、エッセーというジャンルにしても、モンテーニュの「随想録」より二百五十年も早く「徒然草」が書かれていて、随筆というジャンルができていた訳です。こうして、日本の純文学の根底には、日記と随筆と和歌の長い伝統ができあがっていたのです。

こういう永い伝統を持つ国に明治になつて入ってきたのが「ノベル」（小説）です。そのノベルをたちまち消化して、わが身に合い、永い伝統にも適ったスタイルに改良した文学が私小説である、という次第です。

以上が僕の考えですが、繰り返せば、これには日本語の性格が大きく影響していると思います。日本語には、英語などが必要とされるような主語が必要ではなく、主語なしの文章構造があるから、和歌が生まれ俳句が作られたわけです。主語がないために、和歌や俳句は読み手が我がことのように自由に想像し、置き替えて味わうことができる構造を持っていた訳です。これに加えて、日本語には主語と

なるべき固定した一人称がありません。私、俺、僕などと使い分けたり、あるいは、家ではお父さん、ものを書けば筆者、論者などと自称詞を工夫もします。日本語の自称詞はすべてその時の相手や場によって支配され流動する訳です。

こういう日本語の性格は、そのまま日本人の自我意識をも作っています。

最後にもう一度、秋山駿のことは「日本語という言語の、生活への熟した浸透において、あるいは、日常的な生の断片を語るとき文学に熟成された言葉を使えるのは、ほとんどすべて、私小説のおかげである」に戻れば、この「私小説のおかげ」の「私小説」のところには、同時に、「日本語のおかげ」、またその日本語が作り上げてきた日記、随筆、短歌、俳句のおかげ」だと、入れなければならぬと、僕は考えるのです。

おしまいが駆け足になってしまいました。が、長時間のご清聴ありがとうございました。
(文責 森口 透)

(会場・ラッセホール／参加者七十名
懇親会・参加者四十名)